

2 国語科における指導の工夫 —言語活動を取り入れた指導—

新学習指導要領においては、教育内容の主な改善事項として「言語活動の充実」が示され、「国語をはじめ各教科等で批評、論述、討論などの学習を充実」することが求められている。言語活動を通じて指導事項を指導するという自体は現行の学習指導要領においても行われてきたことであるが、国語科においては今後、教科内における言語活動をさらに充実させるのみならず、各教科・科目等の学習における言語活動の充実に資するという視点を併せもつことが求められる。

そこで、「高等学校における教科指導の充実」（国語）においては、昨年度から「新学習指導要領への対応 —言語活動の充実—」をテーマとして、授業を改善する方向を探ってきた。今年度の研究においても、「研究協力委員が勤務校で担当する各科目において、新学習指導要領の指導事項や言語活動例を踏まえて実践する」、「言語活動を取り入れた指導を考える」という点は、昨年度と同じである。今年度の研究の特色としては、「短時間でできる言語活動」という観点から考えたことがある。また、言語活動を充実させるための考察を第3章にまとめた。

なお、参考として「新学習指導要領における国語科改訂の要点」と「高等学校国語科の学習指導要領に示された言語活動例の新旧対照表」を、巻末に掲載した。

事例1 和歌から想起される物語を書く

訓詁注釈に偏りがちな古典の指導を改善することを目指し、生徒が、学習内容への理解を深めながら、古典を学ぶおもしろさを感じることができるよう、言語活動を工夫した。

事例2 短歌を読んで、自分なりに考えたことをリアクションカードに書く

生徒が受け身になりやすい韻文の指導を改善することを目指し、言語活動を通して生徒が自分なりに考える学習場面を設定した。

事例3 「水の東西」をもとに「私の比較文化論」を書く

生徒による作業時間の差が大きくなるために、指導時間がのびてしまいがちになる「書くこと」の指導をできるだけスムーズに展開することを目指し、グループ学習を取り入れた。

<研究協力委員>

栃木県立宇都宮中央女子高等学校	教 諭	稲葉 尚幸
栃木県立小山城南高等学校	教 諭	川上 浩子
栃木県立宇都宮清陵高等学校	教 諭	佐山 功

<研究委員>

栃木県総合教育センター	研究調査部	指導主事	古口 のり子
-------------	-------	------	--------

事例 1

和歌から想起される物語を書く

1 育成を目指す言語能力

日本の伝統的な文化の一つである和歌及び歌物語についての理解を深めながら、そこに描かれた人物、情景をより深くとらえるための言語能力を育成する。新学習指導要領の「国語総合」の指導事項「C 読むこと」の「ウ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。」を指導の中心に取り上げ、「和歌及び歌物語の特質や表現等に留意しながら、内容を的確に捉え、情緒を豊かに膨らませている。」という評価規準を中心にして評価する。また、言語活動例の「ア 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること。」を参考にして設定した、「和歌から想起される物語を書く」という言語活動を通して、前述した能力を育成する。

この実践では、訓詁注釈に偏りがちな古典の指導を改善することを目指し、生徒が、学習内容への理解を深めながら、古典を学ぶおもしろさを感じることができるよう、言語活動を工夫した。具体的には、『伊勢物語』「芥川」の導入として、和歌から想起される物語を書くという言語活動を取り入れることにより、古典作品への興味・関心を高めさせるとともに、学習内容や作品に対する理解を深めさせながら、歌物語における和歌と本文との相互の関係に気づかせることを目指した。

2 学習活動の概要

(1) 単元名 物語 『伊勢物語』－「芥川」－

(2) 単元の目標

- ①和歌や歌物語を読んで、現代との相違点や共通点について、自分の考えを広げたり深めたりしようとする。 (関心・意欲・態度)
- ②本文の内容を的確に把握する。 (読む能力)
- ③和歌及び歌物語に描かれた人物、情景、心情を表現に即して読みとり、それらに対する自分の考えを、話し合いを通して広げたり深めたりする。 (読む能力)
- ④歌物語について理解する。 (知識・理解)
- ⑤助詞の用法や助動詞の意味などの文法事項について理解する。 (知識・理解)

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
①和歌や歌物語を読んで、現代との相違点や共通点について、自分の考えを広げたり深めたりしようとしている。	①本文の内容を的確に把握している。 ②和歌及び歌物語に描かれた人物、情景、心情を表現に即して読みとり、それらに対する自分の考えを、話し合いを通して広げたり深めたりしている。	①歌物語について理解している。 ②助詞の用法や助動詞の意味などの文法事項について理解している。

(4) 指導と評価の計画 (4 時間)

※太線で囲まれた箇所、表題にある言語活動を行った。

※助動詞については一通り学習済みである。

時間	学習活動	指導上の留意点	単元の評価規準と評価方法
1	和歌から想起される物語を書く (1) 『伊勢物語』の成立、内容や歌物語についての概要を確認する。	○できるだけ簡潔に行う。	
	(2) 6人程度のグループになり、ワークシート(資料1)を使って、以下のⅠ～Ⅲを行う(20分)。 Ⅰ 「芥川」作中の和歌「白玉か～」の解釈を行う。 Ⅱ 和歌から読み取ったことを手掛かりにして、詠み込まれている人物や状況等について推測する。 Ⅲ 物語全体のイメージについて話し合い、歌から想起される物語を書く。	○机間指導を行いながら適宜助言を行うが、助言の内容は生徒自らが考えるためのヒント程度にとどめる。 ○和歌から読み取ったこと(語句や文法事項等の知識)を基にして物語を考えさせる。	読む能力② 知識・理解② (ワークシート)への記述の確認及び発表)
	(3) グループごとに、想起される物語を発表する。	○発表時間は、1グループあたり3分程度とする。	
2 4	「芥川」本文を読解する (1) 本文を音読した後、主語を確認しながら現代語訳し、男の行動を順を追って整理する。 (2) 女を失った男の落胆ぶりを、歌に即して読み取る。 (3) 「白玉か」の歌までの部分(前半)とその後の記述(後半)のつながり、描かれ方の違いについて考える。 「芥川」と比較する (1) 「芥川」と自分達が想起した物語とを比較し、相違点や共通点、気づいたこと等について話し合い、発表する。 (2) 歌物語という形式の特質を理解する。	○展開を丁寧に追わせる。 ○男の行動と心情を読み取らせ、歌に恋の顛末が集約されている点に留意させる。 ○「男」、「女」で展開する世界と具体的な人物名で展開する世界との、表現の質の違いに留意させる。 ○物語を想起した際のグループで話し合わせる。 ○物語が和歌に集約していく点を確認させる。	読む能力① 知識・理解② (観察・発言) 関心・意欲・態度① 知識・理解① (観察・発言)

3 評価の例

第1時での和歌の解釈の際は、取り立て指導で直前に助動詞を学習していたことや、グループ学習での学び合いにより、和歌の品詞分解について適宜ヒントを与える程度で、生徒は適切な解釈に至ることができた。人物や状況についての推測及び想起される物語の話し合いは、ワークシートの□「この歌が詠まれた状況を推理してみよう」の項目を踏まえて行った。このため生徒は、「高貴な女性を好きになった男が、その女性と二度と会えなくなったことを悲しんでいる」といった大筋を基にして、物語を膨らませていった。特に、「なぜ二人が「二度と会えない」状況になったのか」という点に関しては、生徒の興味が集中し、非常に活発なやりとりが行われていた。生徒が考えた「二度と会えなくなった」理由は、「女が家に連れ戻されたため」というものと、「女が命を落としたため」というものにと大別された。「会えなくなった理由」を考えるあまりに、根拠の乏しい妄想的な方向に流れそうなグループに対しては、この一点だけにこだわるのではなく、あくまでも和歌から読み取ったことを基にして物語を膨らませるようにと指導した。生徒が想起した物語の内容は、概ね「芥川」に近いものであった（ワークシート記入例（資料1）参照）。第2～4時での「芥川」本文の学習においては、自分達が想起した物語はどの程度「正解」だったのかという点から、生徒が興味をもって臨んでいる様子を見ることができた。

「芥川」本文を学習した後に行った、第4時後半「芥川と自分達が想起した物語との比較」において、各グループから発表された主な内容は、次のようなものである。

- ・まさか「鬼」が出てくるとは思わなかった。現代は「鬼」の存在など全く思うことはないの、やはり時代が違うと感じた。
- ・和歌だけでは具体的なことがわからなかったの、女を「盗み出す」ことまではとても想像できなかったが、「男」の気持ち（女と会えなくなって悲しんでいる）は合っていたのでよかった。
- ・「芥川」の大筋がほぼ想像したとおりの内容だったので、逆に驚いた。和歌の中の助動詞「な」、「まし」の解釈が大きなポイントだったと思う。
- ・「男」が和歌、特に「消えなましましを」に込めた思いは、現代でも変わらない、普遍的な思いであると思う。だから、自分達が想起した物語も、その点はオリジナルと同じになったのだと思う。

（下線は稿者が付した。）

生徒からは波線（～・～）のように、現代との相違点や共通点に関する気づきが多く出された。特に、二重波線（〰）で示した気づきからは、生徒が古典の作品世界を現代につながるものとして実感できたことがわかる。また、破線（- - -）からは、生徒が、授業で学んだ文法の知識を古文を読むことに生かせるものとして実感できたことがわかる。

上述のような生徒の気づきから、歌物語について、以下のようなまとめに導くことができた。

- ・物語の細かいところは、やはり原文を読まないとわからない点が多い。
- ・具体的なことはわからなくても、和歌からは、人物の深い心情を読み取ることができる。和歌は、心情の表現に優れた力を発揮している。
- ・状況等を描写する本文と、心情を表現する和歌の双方がそろって、歌物語という形式の作品が成り立っている。

生徒は学習活動を通して、歌物語における和歌と本文の関係について実感を伴って理解するとともに、古典を原文で読む意義についても認識を新たにすることができた。

以上の実践はワークシートを用いて行ったものである。ワークシートを用いることには、授業をス

ムーズに展開できる良さがある反面、場合によっては、生徒の思考の幅を狭めてしまう危うさもある。そこで参考までに、今回の発展的な試みとして、ワークシートを用いずに物語を想起させた例を資料2に示す。推測するポイントも各グループの話し合いで決めることとしたため、想起した物語の内容には、ややばらつきは出てくるが、その分、生徒は広く伸び伸びと思考することができたようである。

4 成果と課題

(1) 成果

本事例の成果として、次のようなことが挙げられる。

ア 本文（芥川）学習に対する関心・意欲の向上

本文を学習する際、生徒は、「鬼だったんだ」とか「(想像が)当たった」などの感想を発しながら、本文の展開を追っていた。このような生徒の様子は、普段の授業における様子とは明らかに異なるものだった。また、授業後には、質問や「芥川」の感想を伝えに来る生徒も目立った。このような生徒の様子から、和歌から想起される物語を書くという言語活動を通して、本文（芥川）学習に対する関心・意欲を高めることができたと思われる。

イ より正確に読もうとする意識の高まり

和歌を基にして物語を想起するためには、手掛かりとなる語句を正確に捉えながら推測していくことが必要になる。今回の場合は、直前に学習した助動詞の知識を基にして物語を想起させた。前項「3 評価の例」で挙げた生徒の発言からも、生徒は学習活動を通して、助動詞の意味を正確に反映させて作品を読むことの重要性を実感できたことがわかる。

ウ 伝統的な文化を理解するための契機になったこと

自分たちが想起した物語と「芥川」とを比較することにより、生徒は現代との相違点や共通点を明確に意識することができた。このようなことを実感させたことは、生徒が、作品が書かれた時代背景や日本の伝統的な文化について、興味をもち、理解を深めていくための契機になったと考える。和歌から想起される物語を書くという言語活動を通して、古典を現代に通じるものとしてとらえさせることができた。

(2) 課題

課題としては、次のようなことが挙げられる。

ア 言語活動を行う目的を明確に示すこと

何かを生徒に想起させるといった言語活動を授業に取り入れる場合においては、ともすれば生徒の動きの実際は教師の意図を大きく外れ、結果として「学習の目的を見失った活動」に陥ってしまいかねない。それを回避するためには、指導者がその言語活動を行う目的を明確に意識し、それをしっかりと生徒に伝えることが必要である。

イ 適切なヒントの出し方の工夫

生徒にどの程度のヒントを提示したらよいかについては、あらかじめ十分な検討が必要である。ヒントが少なすぎると展開が滞って時間を要するし、ヒントが多過ぎると生徒の考える余地を奪ってしまうことになる。いずれの場合も生徒の意欲を削ぐつまらないものになってしまう。生徒の実態や授業の展開に確保できる時間との兼ね合いなども考慮に入れて、ヒントの出し方を工夫する必要がある。

使用教科書

・『高等学校国語総合改訂版』三省堂

夜露と答へて消えぬまじしものを
 夜露 消えぬまじしもの 希望
 白王 かなどと人 義田用 願 願
 露と答へて消えぬまじしもの
 (訳) 昨夜「あつ米るのは白王が、かなどと人
 あつ(こ)こ(人)が、願をたす時
 「あれは露ですか」と答へて
 (私とその露のまじりに)消えてしまふ、ていた
 (心)が悲しいこと(か)か、たのに……

(物語)

彼女と自分は身分が違ひすぎる。
 でもその自分の縁にしほられるのは嫌だ。
 そうして彼女を屋敷から連れだして、
 二三日で逃がしてやる。
 空屋が草の夜露を照らして輝いてゐる。
 まるごとくしてにたか、だが、どうとう彼女の家に
 捕らわれて、彼女は連れ戻されてしまふ。
 その翌日、彼女の屋敷へ行くと、家来の一人に
 彼女が今朝たか、たかと言われた。
 彼女は病が、たか、たか。
 もう彼女は、たか。
 時間とともに実感して行く。
 あの夜、自分もその夜露のまじりに消えてしまふ、
 彼女ととも消える、たか、たか、たか。

事例 2

短歌を読んで、自分なりに考えたことをリアクションカードに書く

1 育成を目指す言語能力

表現に着目しながら文章を読み味わうという言語能力を育成する。新学習指導要領の「国語総合」の指導事項「C 読むこと」の「ウ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。」を指導の中心に取り上げ、「課題に応じて短歌を読み、自分なりに考えをまとめている。」という評価規準を中心に評価する。また言語活動例の「エ 様々な文章を読み比べ、内容や表現の仕方について、感想を述べたり批評する文章を書いたりすること。」を参考にして設定した、「短歌を読み、内容や表現の仕方などに関して考えたことを書く」という言語活動を通して、前述した能力を育成する。

短歌の指導においては、短歌を好む生徒とそうでない生徒とで、学習活動に対する取組の差が大きい。当然ながら、短歌を好まない生徒の学習活動への取組は消極的になる。この実践では、生徒が受け身になりやすい韻文の指導を改善し、言語活動を通して生徒が自分なりに考える学習場面を設定した。具体的には、リアクションカードを書くことを通して、自分なりに短歌を読み取らせることを目指した。

2 学習活動の概要

(1) 単元名 「短歌と俳句」

(2) 単元の目標

- ① 様々な短歌を読んで、作者やそれぞれの歌に込められた思いについて、自分なりの考えを広げたり深めたりしようとする。 (関心・意欲・態度)
- ② 短歌に詠まれた情景や心情などを読み味わう。 (読む能力)
- ③ 短歌の表現形式や表現技法を理解する。 (知識・理解)
- ④ 作者や作歌背景について理解する。 (知識・理解)

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
① 様々な短歌を読んで、作者やそれぞれの歌に込められた思いについて、自分なりの考えを広げたり深めたりしようとしている。	① 短歌に詠まれた思いや内容を読み取っている。 ② 表現を基にして、想像力をもって作品や作者をとらえている。	① 短歌の表現形式や表現技法を理解している。 ② 作者や作歌背景について理解している。

(4) 指導と評価の計画 (7時間)

※太字で囲まれた箇所、表題にある言語活動を行った。

時間	学習活動	指導上の留意点	単元の評価規準と評価方法
1	与謝野晶子とその作品について学ぶ (1) 一首目 (その子二十揃にながめる黒髪のおごりの春のうつくしきかな) の内容を学ぶ。	○便覧を参考にさせる。 ○歌の内容を把握する上で必要と思われる語句や表現等について説明する。	読む能力① 知識・理解①② (観察・発言)
2	(2) 二首目 (やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君) と三首目 (鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな) の内容を学ぶ。	○歌の内容を把握する上で必要と思われる語句や表現等について説明する。	読む能力① 知識・理解①② (観察・発言)
	【リアクションカードを書く① (授業のまとめ)】 (3) 与謝野晶子の三首の中から好きな歌を取り上げ、自分なりに感じた歌の魅力を書く (10分)。	○堅苦しく考えず、自分が感じたことを書かせる。	関心・意欲・態度① 読む能力② (リアクションカードへの記述の確認)
3	(4) 「リアクションカードのまとめプリント」(資料1)を用いて、与謝野晶子の歌について復習する。	○クラスメイトの考えを参考に、もう一度与謝野晶子の三首を振り返らせる。	関心・意欲・態度① (観察・発言)
	若山牧水とその作品について学ぶ (1) 一首目 (白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ) の内容を学ぶ。	○便覧を参考にさせる。 ○歌の内容を把握する上で必要と思われる語句や表現等について説明する。	読む能力① 知識・理解①② (観察・発言)
4	(2) 二首目 (幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく) と三首目 (海鳥の風にさからふ一ならび一羽くづれてみなくづれたり) の内容を学ぶ。	○歌の内容を把握する上で必要と思われる語句や表現等について説明する。	読む能力① 知識・理解①② (観察・発言)
	石川啄木とその作品について学ぶ 【リアクションカードを書く② (授業への動機付け)】 (1) 石川啄木の三首を読み、自分なりにイメージした啄木像を書く (10分)。	○堅苦しく考えず、自分が感じたことを書かせる。	関心・意欲・態度① 読む能力② (リアクションカードへの記述の確認)
5	(2) 「リアクションカードのまとめプリント」(資料2)を参考にしながら、石川啄木について学ぶ。	○クラスメイトによる石川啄木のイメージと便覧を参考にさせる。	関心・意欲・態度① 知識・理解② (観察・発言)
	(3) 一首目 (たはむれに母を背負ひて/そのあまり軽きに泣きて/三步歩まず) と二首目 (友がみなわれよりえらく見ゆる日よ/花を買ひ来て/妻としたしむ) の内容を学ぶ。	○歌の内容を把握する上で必要と思われる語句や表現等について説明する。	読む能力① 知識・理解①② (観察・発言)
6	(4) 三首目 (みぞれ降る/石狩の野の汽車に読みし/ツルゲエネフの物語かな) の内容を学ぶ。	○歌の内容を把握する上で必要と思われる語句や表現等について説明する。	読む能力① 知識・理解①② (観察・発言)
	北原白秋、斎藤茂吉、島木赤彦とその作品について学ぶ 【リアクションカードを書く③ (発展)】 (1) 北原白秋、斎藤茂吉、島木赤彦の作品の中から一首選び、その歌の魅力を書く (10分)。	○自分なりの受け止め方でかまわないので、表現を基にして想像力を働かせて書くように指示する。	関心・意欲・態度① 読む能力② 知識・理解① (リアクションカードへの記述の確認)
7	(2) 「リアクションカードのまとめプリント」(資料3)を用いて、三人の歌人の中で一番記述が集まった歌を、一首ずつ学ぶ。	○歌の内容を把握する上で必要と思われる語句や表現等について説明する。 ○便覧で歌人についても学ぶ。	関心・意欲・態度① 読む能力① 知識・理解①② (観察・発言)

3 リアクションカードについて

「リアクションカード」（「リアクションペーパー」「ミニツツペーパー」）とは、授業者が自分の授業に対する学習者の反応を見るために用いる用紙である。今回用いたものは、縦約5.5cm×横約8cmでB4の用紙で16枚作れる大きさのものとし、体裁は右のようにした。「リアクションカードのまとめプリント」は、生徒が記述した9枚のカードをA4サイズ用の紙にそのまま貼り、タイトルを手書きするのを基本的なスタイルとした。

今回、リアクションカードを書くという言語活動を行ったねらいは、書くことを通して自分なりに短歌を読ませることにある。カードを書かせるタイミングは、授業の展開に応じて「授業のまとめ」、「授業への動機付け」、「発展」といった場面にした。

前項「(4) 指導と評価の計画」の中の「リアクションカードを書く①」は、リアクションカードを「授業のまとめ」に使用した例である。今回は、「学んだ歌の中で好きな歌を取り上げ、その歌の魅力を書く」といった課題で書かせた。その他には、例えば、「それぞれの短歌で作者が言いたいことは何か」といった課題でも、同様に「授業のまとめ」としてのねらいを果たせるであろう。

前項「(4) 指導と評価の計画」の中の「リアクションカードを書く②」は、リアクションカードを「授業への動機付け」に使用した例である。今回は、「石川啄木の三首を読み、自分なりにイメージした啄木像を書く」という課題で書かせた。その他には、例えば、「この歌人の歌にはどんな特徴があるか」といった課題でも、同様に「授業への動機付け」としてのねらいを果たせるであろう。

前項「(4) 指導と評価の計画」の中の「リアクションカードを書く③」は、リアクションカードを「発展」として使用した例である。今回は「三人の歌人の中から、(まだ学習していない) 一首を選び、その魅力を書く」という課題で書かせた。その他には、例えば、まだ学習していない歌の中から、同じ題材を扱った歌や同じ季節を扱った歌を、「歌合わせ」のように比較させることでも、同様に「発展」としてのねらいを果たせるであろう。

4 評価の例

「リアクションカードを書く①」で生徒が記述してきた主な内容は次ページのようなものである。特に、「その子二十〜」や「やは肌の〜」の歌に対しては、生徒が自らの体験にひきつけて歌を理解したような記述が目立った。また、波線(〜)のように、歌人像に言及した記述もあった。

「リアクションカードを書く①」は「授業のまとめ」として書かせたものであったため、授業で学習したことを基にして自分なりに思い描いた歌の魅力を書けているかという観点から、カードの内容を確認した。この観点から見たときに十分であると評価したカードのうちの9枚を「まとめプリント」(資料1)に掲載し、第3時の授業で配布した。第3時の授業の冒頭では、このプリントを見ながら、掲載されたカードの内容に対して生徒にコメントをさせたり、教師がコメントを加えたりしながら、与謝野晶子の歌をもう一度振り返らせた。

【リアクションカード 表面】

【リアクションカード 裏面】

1年 組 番

(氏 名)

【「リアクションカードを書く①」での、生徒の主な記述内容】

○その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな

・若い女の子特有の弾力のある豊かな黒髪から、強い生命力と美しい青春を描いた短歌は、私たちの世代にとっても合っているように感じられる。

・「櫛にながるる黒髪」という部分だけで、若くて美しいことが伝わってきた。また、今をとても楽しんでいる感じがした。

○やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君

・電車とかに乗っていると、女の人に興味なさそうな人をよく見かけるので、きっとこの歌もそんな人のことをいってるんだと思います。自分なりのイメージをつかみやすい歌だと思いました。そこが魅力です。

○鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな

・大仏のことを美男と言っていることがすごいと思いました。たぶん、大仏を見てほれほれすることはほとんどないと思うので、歌人はとても個性あふれる人なんだなと私は思いました。

・この歌の最後の夏木立と調和しているというところに共感しました。たしかに記憶にある鎌倉の大仏は風景と調和していて美しいと思います。

「リアクションカードを書く②」で生徒が記述してきた主な内容は以下のようなものである。啄木の三首の内容がどれも把握しやすいものであったせいか、生徒がイメージした啄木像はおおむね妥当なものであった。中には波線（～）のように、自分が抱いた啄木像が、歌中のどの表現に着目した結果であるのかを明確にした記述もあった。

「リアクションカードを書く②」は「授業への動機付け」として書かせたものであったため、歌から浮かんでくる歌人像を自分なりにとらえられているかという観点から、カードの内容を確認した。この観点から見たときに十分であると評価したカードや、言葉づかいには若干難があるものの、内容自体はおおむね妥当と評価したカードのうちの9枚を「まとめプリント」(資料2)に掲載し、第5時の授業で配布した。第5時の授業ではこのプリントや便覧を基にして、これらのカードに記述された歌人像が、歌のどの部分から生じたのか、また、記述された内容の適否はどうかなどを考えさせながら、石川啄木とその歌三首について授業をすすめた。

【「リアクションカードを書く②」での、生徒の主な記述内容】

・何かをして、そのときに思った感情を率直に短歌に表わしている人だと思った。

・落ち着いたある静かな人だと思った。

・少し貧しい暮らしをしている人だと思った。

・病気などで食べるものもなく、すっかりやせ細ってしまった母を背負い、あまりの軽さに泣いてしまい、歩けなくなるころから、歌人はとても心優しく、母思いの人なんだなと思う。

・さびしさと悲しさを背負った孤独な人。(母を背負って泣いているところから)

「リアクションカードを書く③」で生徒が選んできた一首は、北原白秋では「照月の～」、斎藤茂吉では「沈黙の～」、島木赤彦では「みづうみの～」が多かった。これらの歌に対して生徒が記述してきた主な内容は次ページのようなものである。特に波線（～）からは、生徒が表現に着目しながら自分なりに歌を読もうとした様子がうかがえる。

「リアクションカードを書く③」は、授業の「発展」として書かせたものであったため、自分が選んだ歌を、表現を基にして自分の力で読めているかという観点から、カードの内容を確認した。この観点から見たときに十分であると評価したカードや、歌に対する解釈の幅を広げるようなカー

下のうちの9枚を「まとめプリント」(資料3)に掲載し、第7時の授業で配布した。第7時の授業ではこのプリントや便覧を基にして、これらのカードに記述された内容が、歌のどの部分から生じたのか、また、記述された内容の適否はどうであるかなどを考えさせながら、「照る月の～」、「沈黙の～」、「みづうみの～」の歌をとりあげ、授業をすすめた。

【リアクションカードを書く③】での、生徒の主な記述内容

○照月の冷さだかなるあかり戸に眼は凝らしつつ盲ひてゆくなり

- ・「照る月は夜、「冷」は冬と悲しさを表しており、だんだん見えなくなる眼に自分の寂しさを表現していると思う。
- ・寒さは定かだけれども自分の眼は確実に見えなくなっている。その証拠に、照る月のあかりは眼を凝らさなければ見えない、という作者の様子が伝わってきました。作者は眼が見えなくなるという恐怖と闘っていたのかなと思います。
- ・作者がだんだん目が見えなくなっていく様子が伝わってきた。明かりを見ても目が見えなくて、さみしそうな様子を思い浮かべた。

○沈黙のわれに見よとぞ百房の黒き葡萄に雨ふりそそぐ

- ・歌人は今さびしいのだという気持ちが伝わってきました。黒い葡萄に雨が降ってさらに重く暗く見せているように感じました。

○みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ

- ・この歌の魅力は三月くらいの湖の様子を表現しているところだと思う。また、きれいな表現のしかただなと思った。「三日月の影波にうつろふ」というところの表現が特徴的だと思った。

今回の授業で回収したリアクションカードを見ると、ほぼすべてのカードに、自分なりに感じた歌の魅力や歌人像、また、歌に対しての解釈などが記されていた。自分の記述したものが、教師の目だけでなく、友人の目にも触れるかもしれないと意識するようになったことで、短歌を自分なりに読んでみようという意識が強くなり働いたようであった。

「まとめプリント」を配ると、生徒たちは、自分の書いたカードが取り上げられているかどうかを探すとともに、掲載されている他の生徒のカードに熱心に目を通していった。そして、一通り目を通し終わると、掲載されている他の生徒のカードについて感想を交わす姿が、教室のあちこちで見られた。このような生徒の様子は、同じ手法で授業を行ったどの教室においても見ることができた。

5 成果と課題

(1) 成果

本事例における成果として、次のようなことが挙げられる。

ア 自分なりに短歌を読み取ろうとする姿勢の高まり

以前の短歌の指導で、ノートに歌の感想を書かせたことがあった。歌に関心のある生徒は別として、そうでない生徒は、「よく意味がわからなかった」、「いい歌だと思う」などといった「一言」を書くだけであったり、促しても結局書けずじまいであったりした。しかし、今回の授業で生徒が書いたリアクションカードを見ると、ほぼすべてのカードに、自分なりに感じた歌の魅力や歌人像、また、歌に対しての解釈がしっかりと記されていた。このような生徒の様子を比べると、クラスメイトの目に触れることを前提としてリアクションカードを書かせることを通して、自分なりに短歌を読もうとする生徒の姿勢を高めることができたのではないかと思われる。

イ まとめプリントを読むことが、作品に対しての生徒各自の考えを、広げたり深めたりするための契機となったこと

「リアクションカードのまとめプリント」には、クラスメイトによる様々な見方が示されている。他者の見方を踏まえながら自分で再び作品に向き合うことは、作品に対する自分の考えを広げたり深めたりすることにつながる。今回の指導では、まとめプリントを読むことが、作品に対しての生徒各自の考えを、広げたり深めたりするための契機となったと思われる。

(2) 課題

課題としては、次のことが挙げられる。

リアクションカードの利用の仕方

リアクションカードに書かせる課題が毎回同じになってしまうと、学習活動がマンネリ化し、生徒の意欲も半減しかねない。今回は、授業の展開に応じて「授業のまとめ」、「授業への動機付け」、「発展」といった様々な使い方をすることで、カードを書く事に対して生徒にマンネリ感を抱かせないように工夫したが、「どのタイミングで」、「どのようなねらいのもとで」、「何を書かせるのか」という点については、その効果も含めて十分に考えなければならない。

なお、リアクションカードは、生徒の記述を見て、次の時間の指導の改善に生かすことができることから、指導と評価の一体化の具体策として手軽に利用することができる。

使用教科書

・『改訂版高等学校国語総合』第一学習社

それぞれの歌の魅力は？

○ A

20歳の女性の軽やかな
青春のスタートをきれいに
書いている短歌だと思ふ。
女性の黒髪にくしけける
所などは女性をすく意識
させるためのものかなと思ふ。

○ A

柳になみたる黒髪という部分だけ
若くて美しいこと体悟できた。
また、今を楽しんでいる感じが
とてました。

○ C

この詩の最後の草木立と語
糸。していよというところに共
感しました。たしかに記憶にある金
魚の太腿は風景と空間 ぶして
いて美しいと思ふ。

○ A

若い者の特有の輝のある豊かな
黒髪が、強い生命力和楽しい青春を
描いた言葉はとて私たちの世代
に合っているように感じられる。

○ A

ルルルルルル —♡

20歳の恋に訴える
純粋な想いが、
スーッと伝わってくる
詩でした。

ルルルルルル —♡

○ C

この時代はまた「信使」はあまり
読れないけれど、自分個人に対
する印象を望むと伝えたい所を
見ると寺謝野氏は時代の履
漸にとらわれず、自分の短歌を
書く人だというのが分る。

○ B

若い女性に恋をしてしまい、自分の
気持ちを伝えるのに生活を送って
いる男性を描いたのだと思います。
種々な性格をとても色々な恋を
描かれます。

○ B

電車とかに乗ると、女の人に
乗る味さそうな人を見かける
ので、あとこの歌もそんな人の
ことをいってるんだと思つて、
なんとなく自分をイメージを
つかみやすい歌だと思ひました。
そこが良かったです。

○ C

私のことを羨望と言っているのが
分ると思ひました。自分を見つ
てほめられることは何となく思ひ
たのでとても個性あふれる人なんだと
私は思ひました。

作者のイメージは？

○

病氣などで、食べる物もなく
す、がりせぬ細くした母を筆
墨に、病気の軽工に泣いてしま
い、あけなげなところから、作者は
とて心で泣いて、人思ひの人
なんだなと思ふ。

○

・親や妻や友人のことにとても大切に思
う、心優しい人
・妻に花を買ってあげたり、女心を分か
てる人
・おれのお車中汽車に乗って大層のりな
人

○

病氣で思ふとての愛情で、短歌
におおきく（？）いる人と思ふ。
作者の短歌（或は本人）の思ふ。
おれ思ひの思ふ（？）の思ふと思ふ。

○

・濃い子、イチャイチャ
真面目で頑固な職人肌

○

・孤独な人。貧しい人。
はじめの友人

○

・家族(母や妻)に思ひの
ある人。
・想像が豊か
・日常的(生活的)な短歌を好
む

○

家族や友達を大切に思
ひ、心優しいおもしろい
人、涙もろい人と思
ふ。

○

さびしさや悲しさを背負った
孤独な人
↑
もう母を背負って泣いてる時から

○

とても悲しい人生、苦勞して
いる、貧しい人生を送って
る人

好きな作品の魅力を紹介しよう。1-1

北原白秋

○ 照月の声とびかかると戸

照る月は夜、寂しさを思わせる表し
あり、せんだん見えなくなる時に自分の
さびしさを表現したものだと思ふ。

○ 照る月の

寒さは定かだけれど、自分の
眼は確実に見ながらこれして
いる。その証拠に、照る月のまは
眼を凝視すれば見えなくなる
という作者の情景がわかる。作者は
眼がみえなくなる恐怖を戦々然と
思わせることが魅力です。

○ 照る月の...

作者がだんたん目が見え
なくなっていく様子が伝わって
きた。月が見えなくなると目が見えな
くたれという様子を思い
浮かべた。

斎藤茂吉

○ 沈黙

沈黙している自分は、百鬼の舞
雨が降りそそいで、自分に見え
てしまっていると思ふ。さしきつろ
い、おもしろいと思ふ。

○ 沈黙の...

作者はさしきつろいという気持ちが伝
わてきた。
黒い舞前に雨が降るのに、重く暗
くおもしろいと思ふ。

○ 沈黙の

自分は沈黙して静かに静かに
感じながら、黒い舞前には
雨が降りそそいで、自分に見え
ていないと反動的な関係に
なっている。

島本赤彦

○ みづみづの...

この歌を想像すると冬から春に
かかると、あまのこころで、三月に
三日月がうつてきておもしろい感じが
してきておもしろい。

○ みづみづの...

この歌の魅力は、三月くらい
の湖の様子を表現して、おもしろい
感じ、おもしろい表現のしるべきな
な。三月の影波にうつると
というところの表現が特徴的で
感じ。

○ みづみづの

水がどけた湖に、三月が
うつると、おもしろい感じがする。
風間の太陽と星と満月
と、おもしろい三月月がうつると
の表現が、おもしろい感じがする。
おもしろい感じがする。

事例 3**「水の東西」をもとに「私の比較文化論」を書く****1 育成を目指す言語能力**

話題や題材に応じて集めた情報を使って、論拠や筋道がはっきりした文章を書くという言語能力を育成する。新学習指導要領の「国語総合」の指導事項「B 書くこと」の「イ 論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること。」を指導の中心に取り上げ、「論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめている。」という評価規準を中心に評価する。また、「国語表現」の言語活動例の「ア 様々な考え方ができる事柄について、幅広い情報を基に自分の考えをまとめ、発表したり討論したりすること。」を参考にして設定した、「様々な考え方ができる事柄について話し合い、それを基にして自分の考えを文章にまとめる」という言語活動を通して、前述した能力を育成する。

この実践では、一般的には「読むこと」の指導において取り上げられる評論文「水の東西」（山崎正和）を、「書くこと」を指導の中心として位置づけ、その能力を育成する手段として「読む」という指導を展開した。生徒による作業時間の差が大きくなるために、指導時間がのびてしまいがちになる「書くこと」の指導を、できるだけスムーズに展開することを目指し、グループ学習を取り入れた。

2 学習活動の概要

(1) 単元名 「論拠や筋道がはっきりした文章を書く」

(2) 単元の目標

- ①「水の東西」を参考にして、二つの事項を対比して自分の見解を述べるために、適切な題材を選び、用語や論理の構成を工夫して書こうとする。 (関心・意欲・態度)
- ②「水の東西」を参考にして、二つの事項を対比して自分の見解を述べるために、適切な題材を選び、用語や論理の構成を工夫して書く。 (書く能力)
- ③二つの事項を対比しながら自己の見解を述べていくのに適した文章の構成を理解する。 (知識・理解)
- ④文章を書く際にふさわしい語句や表現について理解する。 (知識・理解)

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	書く能力	知識・理解
①「水の東西」を参考にして、二つの事項を対比して自分の見解を述べるために、適切な題材を選び、用語や論理の構成を工夫して書こうとしている。	①「水の東西」を参考にして、二つの事項を対比して自分の見解を述べるために、適切な題材を選び、用語や論理の構成を工夫して書いている。	①二つの事項を対比しながら自己の見解を述べていくのに適した文章の構成を理解している。 ②文章を書く際にふさわしい語句や表現について理解している。

(4) 指導と評価の計画(6時間)

※太字で囲まれた箇所、表題にある言語活動を行った。

※年間指導計画においては、この展開に要した6時間はすべて、「書くこと」の指導時間となる。

時間	学習活動	指導上の留意点	単元の評価規準と評価方法
1 3	「水の東西」を読む 論の進め方(二つの事項を対比しながら自己の見解を述べる)に着目して、本文を読解する。		知識・理解① (観察)
4	「東の文化」、「西の文化」の具体例を考える (1)「水の東西」を参考にしながら「東の文化」、「西の文化」の具体例を挙げ、それらにおける違いをワークシート1(資料1)の【1】【2】にまとめる。 (2)ワークシート1の【1】【2】を基にして、自分が考えたことを、グループ内で発表する。 (3)グループ内で話し合い、「東の文化」、「西の文化」の具体例として最もふさわしいものを選ぶ。また、その違いをワークシート1の【3】にまとめる。 (4)グループごとに話し合いの結果を発表する。他グループの意見は、ワークシート2(資料2)にメモする。 (5)もう一度グループ内で話し合い、ワークシート1の【3】の内容を見直す。	○身近な生活の中からもなるべく多くの具体例を考えさせる。 ○5～6名で1グループとし、司会、記録、発表といった分担を決めさせる。 ○グループの中の話し合いにより、自分の考えを広げたり深めたりさせる。 ○他のグループの発表を聞く際には、新たな気付きや疑問点がないかどうか留意させる。	関心・意欲・態度① (ワークシート1、ワークシート2)への記述の確認)
5	「私の比較文化論」を400字程度で書く (1)グループごとに段落構成を考え、ワークシート3(資料3)にまとめる。 (2)グループで考えた段落構成を基にして、各自で400字程度の文章にまとめる。	○適切な段落構成となるように指導する。 ○「自分の考え」と「そう考えた理由(論拠)」は必ず入れるよう指導する。 ○「水の東西」の構成を参考にさせる。 ○構成をまとめることができないグループに対しては、ワークシート4(資料4)を渡し、指導する。 ○資料5「よりよい文章を書くために」を使い、書く際の留意点を意識させる。	関心・意欲・態度① (ワークシート3)への記述の確認) 書く能力① (作品の確認)
6	グループ内で相互評価を行う (1)互いの文章をグループ内で読み合い、相互評価を行う。 (2)グループ内で話し合い、一番よいと思う作品を選ぶ。	○資料5「よりよい文章を書くために」で確認した事項を踏まえて相互評価を行うよう、指導する。 ○全員の作品を回収する。その際、グループで「一番よい」とされた作品は、付箋を貼った状態で提出させる。	知識・理解①② (作品の確認)

3 評価の例

生徒のほとんどが、グループ活動の中で考えた題材や構成に基づいて、「私の比較文化論」を400字程度でまとめることができた。**資料6**の生徒作品は、その中で十分評価できるとした例である。生徒A、生徒Bのどちらの作品も、筋道がはっきりとした文章になっていることに加え、その文章の構成や語句の表現（特に、生徒Aの作品中にある「静止する布と流れる布」という箇所）からは、「水の東西」を参考にして、二つの事項を対比しながら自分の見解を述べていくための工夫を凝らした痕跡を見ることができる。

「書くこと」においては、文章の構成を考える段階で、なかなか構成をまとめられないために、作業が大幅に遅れてしまう生徒がいる。しかし今回は、具体例を選択して文章の構成を考えるとこまでを、グループで話し合いながら共同ですすめさせたことや、必要に応じて「水の東西」の文章を参考にさせたことで、実際に文章を書く場面では、どの生徒も前向きに取り組むことができた。一部には、原稿用紙を前にして、自分の考えをどのように言葉にしたらよいかで悩んだ生徒もいたが、教師が、**ワークシート4** (**資料4**) や「水の東西」を見せながら個別に指導することにより、自分の考えを400字程度でまとめることができた。

4 成果と課題

(1) 成果

本事例の成果として、次のようなことが挙げられる。

ア グループ学習を通して、「書くこと」の指導をスムーズに展開することができたこと

生徒はグループ学習を通して、話題や題材、文章の構成を共有した。その過程で、自分たちの実感を伴った話題や題材を選択したり、構成における論理の矛盾に気づいたりしたことで、適切な段落構成に基づいて、「私の比較文化論」を400字程度でまとめることが可能になったと思われる。

イ 「水の東西」をモデルとすることで、「書くこと」における学習の見通しを与えられたこと

一般に、「書くこと」の指導においては多くの時間を費やすことになりがちである。だが、今回のように、これから書こうとする文章の完成形を先に示して、生徒に学習の見通しをもたせることで、「何もない状態から作品を作り上げるまでを指導する」ことに比べて展開がスムーズになることが期待できる。今回の場合、生徒にとっては「水の東西」を繰り返し読むことが、文章の構成を考えたり文章を書き進めていく際のヒントになった。「書くこと」の指導の初期の段階や、「書くこと」に対して不慣れな生徒が多いような状況においては、このような工夫は効果的なのではないかと考える。

(2) 課題

課題としては、次のようなことが挙げられる。

ア 年間指導計画の見直し

「書くこと」の指導において、生徒に作品を書きあげさせるためには、ある程度のまとまった指導時間が必要である。そのためには、年間指導計画を見直して、取り上げる教材や言語活動について検討し、計画的に配置する必要がある。

イ 補助教材の共有化

受け身の学習になりがちな生徒を、主体的に学習活動に取り組ませるためには、生徒の状態に合わせてワークシート等を配布することで、適切に支援することが必要になる場合がある。また一方で、ワークシートには、それを用いることでスムーズに授業を展開できるという良さがある反面、場合によっては生徒の思考の幅を狭めてしまうこともある。

このため、ワークシートは、生徒の反応を確認しながら、生徒に合ったものを随時開発することが大切である。また、開発したワークシートは、教科内で共有することが望ましいと考える。

さらに、今後は「書くこと」に関して指導する際の資料を、国語科が他教科に提供する方向も視野に入れていく必要があるものとする。

使用教科書

- ・『改訂版高等学校国語総合』第一学習社

参考文献

- ・田中孝一編 『新しい高校国語 指導の論理と実践 第二巻 書くことの指導』 明治書院

「水の東西」作業プリント 2

() (組) () (番 名前) ()

※目録例
 「4」他のグループの意見もメモしておこう。

※目録例
 「東の文化」

⑥
⑤
④
③
②
① 例 ※その通り
例 流れる水

「西の文化」

⑥
⑤
④
③
②
① 例
例 噴き上げる水

ワークシート 2 記入例

「水の東西」作業プリント 2

() (組) () (番 名前) ()

※目録例
 「4」他のグループの意見もメモしておこう。

※目録例
 「東の文化」

⑥
⑤
④ 動きにくい、形が規則的
あちついでこころ
③ 動きやすい、形が不規則
華やか
② 動きやすい、形が不規則
華やか
① 動きやすい、形が不規則
華やか
⑦ 石造の家

※目録例
 「西の文化」

⑥
⑤
④ 洋菓子
③ ミニ
② 洋服
① フロアリング
⑦ スパイン、ファブリック、ナイフ
⑧ 石造の家

よりよい文章を書くために

文章表現をよくするためには、次のことが大切です。

- 1 言いたいことがはつきりと書かれているか。
- 2 言いたいことが順序よく書かれているか。
- 3 一つ一つの段落がきちんと分けられているか。
- 4 一つ一つの文がわかりやすく書かれているか。

・主語と述語 修飾語と被修飾語がきちんと対応していること
・文は長すぎないようにすること

- 5 適切な言葉を選んでいるか。

- 6 正しく書いているか。

・漢字 仮名遣いに誤りがないこと
・読点の打ち方が適切であること

※ 自分の書いた文章を確認してみよう。

* 田中孝一編「新しからぬ新編国語 指導の語理と実践第二巻 書くこと」の103～104ページを参考に作成した。

(生徒Aの作品) 「服の東西」

東の文化を代表する具体例として和服を、西の文化を代表する具体例として洋服を考えた。まず、それぞれの特徴を考えることにする。

和服の特徴として、動きにくいことや柄で季節感を表せること等がある。和服は既に型が決まっていることが多く、その型によって季節を表すのは難しい。そこで季節に応じた柄を使い、四季を楽しむのだ。これは和服の醍醐味と言えるのではないか。

洋服の特徴は、動きやすいことや柄で季節感が表せないこと等がある。洋服は和服よりも型の種類が多くあり、動きやすいものも多々ある。また型によって、夏を涼しく、また冬を暖かく過ごすことができるために、柄を使わなくても季節感を表すことができる。

静止する布と流れる布。

和服と洋服の特徴は、この言葉で表せる。和服は布地を多く使っているため肌の露出が多くない。このことから、和服を着ると、自然と身が引き締まり、動きが小さくなる場合も多い。動きが小さいと布が大きく揺れたりせず、ドレープもできない。このことから、和服は静止する布と言える。一方、洋服は布地に動きがあることにより、ドレープができることもある。ドレープの流れるようなラインから、動きやすさや軽やかさが感じられる。このことから、洋服は流れる布と言える。

このように考えると、和服にも洋服にもそれぞれ良い点があり、どちらを着用してもその人の個性を表現することができる。現在、日本では和服を着用することが少なくなった。動きにくいことで敬遠されがちな和服だが、日本人特有の季節感を楽しむという点で見直してみたい。

(生徒Bの作品) 「菓子の東西」

菓子は人々の娯楽の一つであるが、日本と欧米を比べてみると大きな違いがある。その違いについて考えてみたい。

まず日本の和菓子である。その特徴として、植物性の材料が多いことや、見た目や味が簡素であるということがあげられる。それに対し欧米の洋菓子は、特徴として動物性の材料も多く用いられることや、ボリュームもあり派手であることがあげられる。

その違いの原因について考えてみたい。日本の文化は、シンプルで一見すると地味なものが多い。同様に菓子も甘さ控えめで小さなものを好んだと考えられる。それに対し欧米の文化はカラフルで華やかなものが多い。やはり菓子でも味の濃いものや甘さの強い、サイズも大きいものを求め好んだのではないだろうか。また、宗教の違いによる食文化の違いも、菓子に影響を及ぼしている可能性も考えられる。

このように考えてみると、和菓子と洋菓子は見た目や味に多くの違いがある。しかし、どちらにしる人々に喜びや安らぎを与えるものであることに変わりないだろう。